

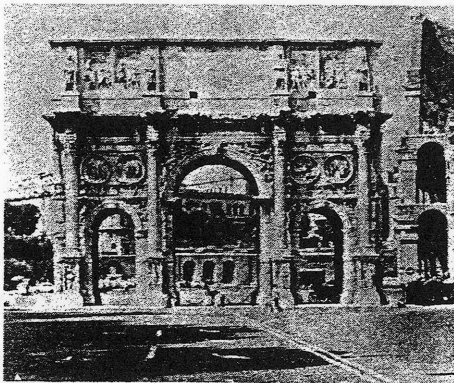
ヨーロッパ文化誌のなかの「門」

大江一道 (本学文化学科教授)

門とは、ふつう、特定の形をもった出入口としての建造物をさします。象徴的には、二つの空間を隔てる境界の記号であり、「二つの状態、二つの世界、既知と未知、光と闇、裕福と窮乏の間の通路である」と定義されるぐらい(『世界シンボル大事典』大修館)、じつに多義的な意味をもっております。門は通路であります、ここを通過する人に力動的、心理的な価値を付与する、いざないのモニュメントともなります。

これから、ヨーロッパ文化誌——ここでの「誌」とは史Ⅱヒストリーも含む文化のカタログと考えてください——のなかで、「門」にかんする五つの表象を選んでお話ししてみようと思います。

最初に見てみたいのは、古代ローマの「凱旋門」(triumphal arch)です。ローマではすでに共和政の時代から、戦勝をえた将軍がローマ市内で凱旋式を行なう記念として、



コンスタンティヌス帝の凱旋門

凱旋門を建てました。前二世紀初め、大スキピオが建てた凱旋門が最古のものといわれますが、アーチによる通路と、

その上部の碑文パネルという基本形式は受けつがれ、のちには堂々たる三連アーチ門も現われます。いまもローマのコロッセウムの傍にある、三一五年に完成した「コンスタンティヌス帝の凱旋門」は、その代表といつてよいでしょう。

凱旋門は、ローマにだけでなく、支配領域を拡大したガリア（フランス）、シリア、北アフリカなどにも建てられました。

「勝利の門」としての凱旋門は、將軍や皇帝の勝利と偉大を人々の視覚に焼きつけ、通過する人々の心を権力の高みに向けていざない、尊崇心をいや増さしめようとする、建造主の無限願望がこめられているはずであります。皇帝ナポレオンははるか昔に消えましたが、古代ローマ皇帝にならってナポレオンがパリのシャンゼリゼ通りに建てた凱旋門は、いまなおパリに偉大な景観をそえ、この首都の誇りとなっていることはご存知の通りであります。

二つめは、中世都市の市門のなから、「誘拐の門」として永く記憶される、ドイツのハーメルン市の東門について考えてみましょう。一二八四年六月二十六日、ハーメルンでは世にも不思議なことが起こったのです。その日、笛を吹き鳴らしてねずみを残らず退治する（町を流れるウェーゼル川におびき寄せて沈めてしまう）男に、一三〇人の子どもたちが誘拐され、東の門から出ていったきり戻ってこ

なかったという事件です。この話は、十九世紀初めにグリム兄弟によってまとめられたドイツの伝説のひとつとして有名になり、今ではハーメルン市が毎日曜日には広場に舞台をつくって、笛吹き男とねずみや子どもたちの寸劇を見せるほどの観光名物になっているそうです。また、このハーメルンの伝説の学問的研究は、中世史の泰斗阿部謹也さん（現一橋大学学長）によって興味深い『ハーメルンの笛吹き男』（平凡社）という著作になっていますから、これに当たってもらうのがよいのですが、かいつまんでお話ししますとこういふことです。

ヨーロッパの中世都市は、どこでも、農村部から明確に区分される城壁と市門をもち、町は、商人と手工業者を主にした市民によって自治的に治められていました。ドイツの諺で「都市の空気は自由にする」といわれたぐらい、市民は身分上の自由をえていたのですが、現在の進んだ研究によれば、そういう自由な市民は住民の二割かそこらで、大部分は無権利か権利を制限された社会的には劣位の立場の民衆で、かれらの暮しはかつつかつかそれ以下であり、キリスト教の暦にもとづく年になんとかの祝祭日だけが楽しみ、という日常生活を送っていたのでした。六月二十六日は、聖ヨハネとパウロの日という祭日で、町には市門を通じて旅芸人などが集まってくるにぎやかな日でした。赤い帽子をかぶり狩人のかっこうをした笛吹き男もそのひとりで、

面白がった子どもたちはその日昼ごろこの笛吹き男の後をくっついて、町の通りを抜け、東門から出ていったっきり二度と帰ってこなかった、という伝説がながく信じられてきました。

この伝説の解釈については、ひとつには定住地を持たない笛吹き男という旅芸人というのは、刑吏や墓掘り人などの賤民とおなじように社会から冷たい目で見られる差別された存在であり、ねずみを退治してみせたのに約束の代金を支払ってくれなかったハーメルン市のお偉方に腹をたて、仕返しに子どもを誘拐したのではないかとという見方です。

もうひとつに、東門を出た一三〇人の子どもたちは、一体どこへ行ってしまったのかという失踪のゆくえです。これらのことについては、さきの阿部謹也さんの著作にくわしい追求がありますからそれにまかせるとして、門とは、そこをひとたび出たら二度とは戻ることができないこともある、不幸と暗黒の世界への入口というシンボルでもあるのだ、ということがこの伝説から読みとれる、というのが重要ではないかと思われまます。

異界への入口という意味では最も恐ろしいのは「地獄の門」のイメージでしょうか。これをみごとに表象したのがダンテの『神曲』であります。ダンテは十三世紀末のフィレンツェの人ですが、ハーメルンで子ども失踪事件が起こった一八二四年には十九歳の青年になっていました。青年ダ

ンテは、フィレンツェのアルノ川にかかる橋（ポンテ・ヴェッキオ）のたもとで出会った美少女ベアトリーチェへの、清純な思いをつのらせていた年頃であります。ベアトリーチェは結局他人の妻となり、まもなく二十五歳の若さでこの世を去りました。それからの一〇年間、ダンテは自堕落な生活を送るのですが、三〇歳の頃からフィレンツェ共和政治にかかわりだし、一三〇〇年には政務長官（プリオール）の一人に選ばれました。

当時のフィレンツェの政争はすさまじく、ダンテがぞくしていた党派ビアンキ党（白党）は、一三〇二年に市政をにぎった反対党に追放され、ダンテも永久追放の憂き目にあいました。ポローニャ、ヴェローナ、ラヴェンナなどを転々とし、怒りと憎しみをたぎらせたダンテにフィレンツェに帰れる機会はおとずれず、一三二一年五十六歳で異境の地で世を去りました。その流浪のなかで書かれたのが、世界文学史上に輝かしい名をしるす『神曲』であります。

『神曲』は、地獄、煉獄、天国の三篇に分かれた一〇〇の歌、全体で一万四三三行からなる叙事詩で、地獄（三四歌）、煉獄（三三歌）の二篇は一三〇七—一三二一年にでき、天国篇（三三歌）は一三二一年の死の直前に完成したものだといわれています。中世ヨーロッパの書きものはふつうラテン語で書かれたのですが、『神曲』は当時のフィレンツェあたりでつかわれた言葉、トスカーナ語という俗語で

書かれておりまして、『神曲』が母国語で書かれた近代文学の先駆的業績といわれるゆえんなのであります。

また、この作品を、ダンテ自身ははじめ単に「コンメディア」つまり喜劇と呼んだのですが、十六世紀半ばのヴェネツィア版で「Divina Commedia」という題名が決定し、この言葉を森鷗外がアンデルセンの『即興詩人』を訳したとき、その中ででてくる「ディヴィナ・コメディア」を『神曲』と訳して以来日本ではこの名前で広く知られるようになったといわれています。ダンテは、この作品をもとも「コメディ（喜劇）」として見ていたのだということも、知っておいてよいことかと思えます。

さて、地獄篇第一歌は、「人生の道の半ばで正道を踏みはずした私が目をさました時は暗い森の中にいた」（平川祐弘訳）という、わが身の来し方を振り返る歌で始まります。その森から案内人の手によって地獄を案内されるわけですが、その入り口にあるのが「地獄の門」で、その門の上にある九行の銘文が有名な詩なのです。これを上田敏、森鷗外、夏目漱石など何人もの人が記して今にいたっています。ここでは、森鷗外が『即興詩人』の中にあるこの銘文を、翻譯の底本としたドイツ語訳のものを翻譯したのと、夏目漱石が『倫敦塔』の中で英語訳から翻譯したのとを並べてみましょう。はじめのは森鷗外訳のものです。

こゝすぎて うれへの市に

こゝすぎて 歎きの淵
こゝすぎて 浮ぶ時なき

群に社 人は入るらめ

あたたかき 情はあれど

おぎろなき 心にとづね

きはみなき ちからによりて

いつくしき 法をうき世に

しめさむと この闇の戸を

神や据ゑけむ

夏目漱石訳は次のとおりです。

憂の国に行かんとするものは此門を潜れ。

永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものは此門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は

最初愛は、われを作る。

我が前に物なし只無窮あり我は無窮に

忍ぶるものなり。

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

由来、ユダヤ教やキリスト教の伝承では門の重要性は大変なもので、新約聖書には、神の国に辿りつくためにくぐる「天国の門」は、富める者にはラクダが針の孔を通るよりもはるかに困難な「狭き門」なのだと言われています。

一方の「地獄の門」はひとたびくぐれば、一切の望みは捨てなければならぬのです。門を過ぎればもはや暗闇の世界なのです。

ダンテが描いた三界の構造図は、ここでは割愛しなければなりませんし、ダンテが地獄で見たさまざまの恐しい場面も、直接『神曲』を開いてもらうほかありませんが、その一部を図像化した傑作、ロダンの制作したブロンズ製の『地獄の門』とその浮彫りについて一言しておきます。これは、一八八〇年、フランス第三共和国の政府が、テュイルリー公園の装飾美術の陳列館のために、大扉の原型制作をロダンに依頼することになり、ロダンは八〇〇〇フランで契約しました。ただちに、ダンテの『神曲』地獄篇をテーマにして制作を開始しましたが、発想はしだいに流動的になって原典から離れ、巨大なスケールのもものとなり、一七七年のロダンの死まで制作が続けられたのでした。

制作の費用を日本の松方幸次郎が負担をしたことから、二つの実物のひとつが、上野にある国立西洋美術館の内庭に立っており、私たちがいま目のあたりにすることができのです。左右二面の開かずの扉を中心に、欄間と柱も含めて高さ五・四メートル、幅三・九メートルの堂々たる青銅の門です。さきに紹介したダンテの銘文はありませんがこの門に登場する浮彫りの人物は全部で一八四人、そのほとんどが、時のない闇に塗られた大気のなかで阿鼻叫喚に

喘いでいる姿が、流動的に刻まれているのです。おそらく、これほどみごとに地獄の門を表象したものはほかにはないでしょう。

門とは、天国、光、善に向かう入口でもあれば、この「地獄の門」のように、救いのない暗黒、闇、悪、不幸にも転落する境界のシンボルともなるといふ両義性をもつものだ、と、古今東西の人間は共通して考えていたようであります。

さらに、別離ないし訣別の門の意味でも使われることがあります。みなさんもよくうたうであろうシューベルトの『冬の旅』の第五曲「ぼだい樹」(Der Lindenbaum)のなかにその門がでてまいります。

『冬の旅』は、愛からも、希望からも見捨てられた、徹底して孤独な若者の、絶望の歌です。その若者が荒涼とした冬の旅路にのぼる歌「おやすみ」を第一曲として始まり「辻音楽師」で終わる全二十四曲すべてが名曲といつてよい、ドイツ・ロマン主義の傑作ですが、なかでも代表曲とされるのが、第五曲の「ぼだい樹」です。この曲は四部分に分かれています。幻想的な長調でかかれた第一部を、原文と、今は亡きドイツ文学者生野幸吉さんの名訳とを並べることになります。

Am Brunnen vor dem Tore

Da Steht ein Lindenbaum;

Ich träumt in seinem Schatten
So manchen süßen Traum.

Ich schnitt in seine Rinde

So manches liebe Wort;

Es zog in Freud und Leide

Zu ihm mich immer Fort.

村の門のまえ、泉のほとりに、

ひともとの茂る菩提樹。

その葉の蔭にまどろみ

あまたたびやさしい夢を夢みた。

樹皮の厚さに彫りつけた

かずかずの愛のことば、

その文字は、よろこびのたび、うれいのたびに、

たえずわたしを菩提樹のほとりへ呼んだ。

ドイツの村々には、ふつう、門＝das Torがあつて、その前の広場と泉は、村人の憩いの場でもあります。若者は、夜ふけて泉のほとりに立つばだい樹の下を横ぎり、木の幹に愛の言葉を彫りつけたこともあつたそのぼだい樹にも別れをつけて、荒涼とした遠い冬の旅に出ようとしている、

まさにこれは訣別の歌なのです。第二部の短調では、ぼだい樹の葉ずれのざわめきが、離れていく若者に、ここがおまえの憩いの地なのだ、と呼びかけているようだ、引き留められそうな切ない思いをうたっています。

門は、門番がいるいないに関係なく、その内側の者からすれば、狭い閉ざされた空間を守り、安らぎと憩いを保障してくれる排他的な境界の象徴であります。門を越えて出ていこうとする者にとっては、身内との縁を切り、代わりに広い、あてもない異境、異空間に身を曝す、スタートラインにはかなりません。世界に羽ばたこうとする者にとっては避けられない、通過儀礼としての旅立ちのしるしをつける場所でもあります。映画『アマディウス』を御覧になった方は、終末のシーンでわかるように、共同墓地に埋められる、棄てらるモーツアルトの亡骸を見送る人は、ウィーンの市門までは来ても、内側に立って別れるしかなかったのです。門の外は、死者が行く世界でもありました。「ぼだい樹」は、そういう人生のきびしさをうたっているわけで、そのキーワードは「ツール（ア）」つまり「門」なのであります。

最後にとりあげてみたいのは、十九世紀のパリの民衆にとって、市門はいかなる意味をもっていたか、という問題であります。パリは、高さ三・三メートルの石造りの壁に囲まれた三四平方キロメートルの首都でした。人口は、一

八四六年には一〇〇万を越えますが、人々も物資も、市壁の各所に設けられた六〇ばかりの入市税がかかる市門からしか出入りできませんでした。フランス革命のころ、市民はこんな歌をうたってウサばらしをしていたといえます。

パリの口を閉ざす壁

不平の口を開く壁

請負い収入ふやすため

市民の見晴し閉ざすため

パリは監獄檻の中

そして、革命のとき市民はこの市門を焼き打ちし、そのあといちじ入市税も廃止されましたが、一七九八年にはふたたび復活し、十九世紀に入ってもこれは変わりませんでした。

入市税収入は、表1をみればわかるとおりパリが断然高く、住民一人当りの負担も重かったのです。また、表2に示されているとおり、入市税で一番多かったのがワインなど酒類でありました。そこから生まれた商人、市民の智慧が、市門の外に酒場をつくり、そこで、入市税のかからないワインを安く飲ませるといふ商売です。この酒場のことを「関の酒場」といいました。市門の外には、酒場だけでなく見世物小屋や露店が安息日には立ち並び、市門の外空地や路上が市民の憩いの場になりました。

中小手工業者のブティックが多い十九世紀のパリは、本

質的には労働者の街で、光りもささない狭い部屋に住む働く民衆とその家族は、日曜日ともなると一家でくりだして光りの溢れる市門の外に出かけ、リクリエーションを楽しむという生活圏をつくっていたのです。労働者は、関の酒場で顔見知りのカルチェのなかまと安い酒を飲んで、人の噂や重い税金への不平をぶつけあい、談論風発、翌日の月曜日まで延長させることもあり、月曜日は仕事にならないこともありました。これを「聖月曜日」と呼んだのでした。

ときには、政治への怒りが高まり、共同謀議が生まれ、月曜日には酒場から市中に向けて抗議のデモにくりだすこともしばしばでした。つまり、市門の外、関の酒場は、早変わりして民衆騒擾・抵抗の、拠点根拠地ともなったのです。門の象徴作用が抵抗の文化記号ともなったといえるのではないでしょうか。

十九世紀のちょうど半ば、クーデターに続き人民投票をへてついに皇帝にさえなったナポレオン三世（一世の甥）は、このパリを恐れて、セーヌ県知事オースマンに命じてパリの大改造にふみきったのです。市壁をとりこわして市域をずっと拡大し——市外にあったモンマルトル丘は市内にくみこまれた——、区画整理を断行して古い家々をこわし、道路も広げて見晴らしのよい市街に転換させました。詩人ボードレールが、古きパリは今やなしとうたったのは、このパリの変貌をかなしんでのことでありました。十九世

表 1 フランス諸都市の入市税一覧 (fr=フラン, c=サンチーム)

都 市 名	市壁の有無	人 口	入市税収入	収税経費率	住民一人当たり負担	
パ リ	有	930,000	30,640,000fr	6 %	32fr	94c
リ ヨ ン	部分的	150,000	2,866,000	13 —	19	10
マ ル セ イ ユ	無	128,000	2,466,000	15 —	19	20
ボ ル ド ー	無	100,000	1,895,000	15 —	18	95
ル ー ア ン	無	94,000	1,700,000	17 —	18	08
トゥールーズ	無	68,000	1,214,000	12 —	17	85
ナ ン ト	無	73,000	1,104,000	14 —	15	12
リ ー ル	有	72,000	935,000	8 —	12	98
ストラズブール	有	70,000	645,000	10 —	9	12

(以下略)

(備考) 年間税総額40万フラン以上の都市 1839, 1840, 1841年についての平均額

表 2 バリ入市税品目別徴収額 (fr=フラン, c=サンチーム) 上位品目

入 市 税 品 目	税 収 額		
	1842	1843	1844
ぶどう酒・リキュール・シードル・梨酒・酒造用果実 ……	12,603,318fr29c	13,287,434fr—	12,462,420fr10c
変性アルコール (新設) ……	—	—	3,031 89
油・酢・ビール・テレピン油			
乾ぶどう ……	3,140,402	2,976,202 —	3,170,092 76
燃料 ……	5,469,635 95	5,561,689 —	5,735,061 06
食料品 ……	4,519,213 86	5,955,751 —	4,615,145 95

(出典) オラス・セイ『パリ市及びセーヌ県の行政に関する研究』, バリ, 1846, p. 123

(表 1、表 2 とも喜安朗『パリの聖月曜日』平凡社より)

紀半ばまでパリの名物でもあったバリケード市街戦は、一八七一年のパリ・コミューンの場合をのぞいては消滅しました。「徴税の門」としての市門もまたその歴史を終えたのでした。

以上、門という記号がもつ意味を、古代ローマから十九世紀パリまで、五つの事例をたどりつつ探ってみました。門という境界がもつ意味は、みなさんの家庭や学校の門など、ごく日常のなにげない出入口にまで広がっていく可能性をもっています。学問であれ芸道であれ、入門もあれば破門もあります。

門が不在の文化と人生は考えられない、といってよいでしょう。門というキーワードを切り口にして知の歴史学を読みとっていく、その姿勢も大切なことなのではないでしょうか。ご清聴ありがとうございました。

本稿は平成九年十月二十五日、跡見学園女子大学公開講座、共通テーマ「門」での講演を整理したものです。
あります。

(おおえ かずみち・西洋文化史)